

米国、ヨーロッパおよびラテンアメリカ におけるラテンアメリカ研究

—その歴史と現状と問題点—

Carmelo Mesa-Lago*

国本伊代訳

I. ラテンアメリカ研究の起源の発展

19世紀末から第1次大戦にかけて米国のいくつかの主要大学に語学と歴史を中心としたラテンアメリカ関係コースが設置された。両大戦間に米国ではラテンアメリカへの関心が高まった。これはラテンアメリカ貿易と投資の担い手がヨーロッパから米国に変わったこと、パナマ運河が開通したこと、またローズベルト大統領が善隣政策をとったことによるところが大きい。この期間に米国でラテンアメリカに関するコースの数は3倍に増加し、335の総合大学と単科大学で計875のコースが設けられた。そして、ラテンアメリカ地域研究の先駆的な体系的プログラムがテキサス大学(1915)、チューレーン大学(1924)、フロリダ大学(1930)、ウイコンシン大学(1934)、およびニューメキシコ大学(1939)に設置されたのである(表1参照)。

同じ時期に西ヨーロッパにおいてもいくつかのラテンアメリカ研究のプログラムが組織された。ドイツではハンブルグ(1917)とベルリン(1930)に、またスウェーデンではエーテボリ(1939)にプログラムが設置された(表2参照)。ドイツのプログラムは大学に設置されたものではなかった。ベルリン・イペロアメリカ研究所は移民に援助を与えるため文化省が後援する図書館兼情報センターであったし、またハンブルグのプログラムはラテンアメリカとの貿易を促進するために設置されたものである。一方エーテボリ・センターは主としてラテンアメリカの言語と文化を教える目的でスウェーデンの最も古い大学の一つに設置された。他方米国の5つのプログラムはすべて大学内に設けられ、これらの5つのうち4大学は南部およびメキシコに国境を接する州にありラテンアメリカとの貿易取引の多い地域にあった。ラテンアメリカにはラテンアメリカを研究

するプログラムはなかった。

第2次大戦の結果米国は外国の言語、地理、文化等の専門家を養成する必要にせまられた。戦後の冷戦とマージナル・プランがこれらの専門家の必要性を一層高め、ソ連および中国研究のプログラムが米国の大学に広まった。しかしラテンアメリカは米国にとって戦略的にそれほど重要な地域ではなかったのである。なぜならラテンアメリカは「安全な米国の裏庭」と考えられていたからである。その結果1945年から1959年の間に米国ではラテンアメリカ研究に関する大きなプログラムはわずか2〜3しか設置されなかった。ヨーロッパでこの時期に設立された大きなプログラムはマドリードのイスパニヤ文化研究所である。これはラテンアメリカにスペイン文化を広げることによってフランコ支配下のスペインをボイコットしている世界的な動きを打ち破ろうとする目的でフランコ将軍が創ったものである。この他にパリとロンドンにラテンアメリカ研究プログラムが創設されたほか、ベルリンの研究所がベルリンの東側から西側へ移転した。ラテンアメリカにはまだラテンアメリカ研究プログラムは存在していない。

1960年代の10年間は北米とヨーロッパで目ざましいラテンアメリカ研究ブームがみられた。米国とカナダでは約200校に近い大学にラテンアメリカ研究プログラムが設置され、専門研究者の数は6倍に増加した。ヨーロッパでは約26のラテンアメリカ研究プログラムがイギリス、ソ連、東西両ドイツ、スウェーデン、オランダ、オーストリア、イタリア、チェコスロバキアに設置された。米国における外国研究およびラテンアメリカ研究ブームは主として国家の安全保障と関係していた。まずソ連がスプートニクを打ち上げたことによりソ連に対する米国の技術的戦略的優位が疑問視され不安をもたらしただけに始まり、キューバ革命の勃発によってラテンアメリカにおける米国の覇権がゆらぎキューバ革命がラテンアメリカへ広がるのではないかという脅威が高まったこと、つづいて1962年のミサイル危機によりラテンアメリカが核による対決を発生させることが明らかになったことなどがあげられる。その他にも米国におけるラテンアメリカ研究ブームの原因としては、戦後のベビー・ブーム期に生まれた世代が高等教育を受ける年齢に達したため大学への入学者数が大幅に増加したことや、米国のベトナムへの介入に嫌悪する大学生の間で外国の文化を学

ぼうとする関心が高まりその結果対抗文化が勃興したことがあげられる。以上のような経緯の中で国家防衛教育法(NDEA)は米国の大学にある100以上の地域研究センターに資金を与え数千にのぼる奨学金を出したが、そのうち20のセンターと300の奨学金はラテンアメリカ研究に割当てられた。「進歩のための同盟」や「米国援助法」のような経済的にラテンアメリカを援助するための組織が設立され、また強化された。フォード財団も外国研究およびラテンアメリカ研究の分野へ資金を援助しはじめ、米国のいくつかの大学は多額のフォード助成金を受けた。授業料による財政収入が伸びたこと、ラテンアメリカ関係コースおよび補助金・技術援助契約への要望が高まったこと、それらの要望に連邦政府資金が答えたことから、大学当局もラテンアメリカ研究により多くの資金を出すようになった。

ヨーロッパでラテンアメリカ研究ブームをもたらした要因は、米国におけるものとそれほど違ったものではない。キューバ革命はヨーロッパ第1次大戦後米国に譲り渡したラテンアメリカにおける経済的政治的影響力をとりもどせるのではないかという希望をもたらした。ミサイル危機は第3次大戦が起こりうることを、そしてヨーロッパが全滅するかもしれないという考えから多大な関心を呼び起こした。しかしその他にもいくつかの理由があった。まず西ドイツの経済ブームによって対ラテンアメリカ貿易が伸びたこと、西ドイツとイタリアのキリスト教民主党がラテンアメリカの友党とともにラテンアメリカ研究に資金援助を行ったこと、西ドイツとイギリスにあるヨーロッパでも主要な財団がラテンアメリカ研究へ助成を開始したことなどがあげられる。イギリスではラテンアメリカ研究者側からの強い要請と政府側の関心が合致したため、まず調査委員会が設置され、その結果主要大学に5～6のラテンアメリカ研究センターを設置し10年間にわたって資金が援助されることになった。東ヨーロッパではキューバ革命の成功によって、「米国の裏庭」における共産主義政権の存立の可能性に対するソ連の古い考え方が変化した。その結果ソ連と東ヨーロッパ諸国の政府はともに専門研究機関や大学および科学アカデミーを通じてラテンアメリカに関する研究や教育を援助しはじめた。

ラテンアメリカでは第2次大戦後に国連ラテンアメリカ経済委員会(ECLA・1948)、ラテンアメリカ社会科学会議(FLACSO・1957)、ラテンアメリカ社会

科学委員会(CLACSO・1967), ラテンアメリカ経済統合に関する全体研究プログラム(ECIEL・1970年代半ば)のようなラテンアメリカ研究プログラムがつけられたが、いずれも経済学と社会科学による研究および研修と政策研究志向のもので学際的な性格のものではなく、米国やヨーロッパ型の地域研究プログラムではなかった。ラテンアメリカをわずかながら含めた国際研究プログラムがチリと西インド諸島で組織された。キューバでは文学研究所である Casa de las Américas が創設された。1966年にメキシコ国立自治大学が最初のラテンアメリカ研究センターを設置した。しかしラテンアメリカではまだ2~3の研究所しかない状態であったため、ラテンアメリカ研究を専攻しようとするこの地域の学生は大学レベルの勉強のためには米国やヨーロッパへ行かねばならなかったのである。

「上昇するものはすべて必ず下降する」という諺が経済学にはある。1960年代が米国とヨーロッパでラテンアメリカ研究ブームをむかえた10年間であったのに対して、1970年代は国際研究とラテンアメリカ研究の停滞の10年間となった。米国における財政と社会問題のため国民の関心は国内問題へと移り、都市問題、黒人および女性問題研究、あるいは公害とエネルギーなどに関心が集中した。連邦政府や州政府の援助資金の打ち切りや高まるインフレによって、またベビーブーム世代の高等教育就学時が過ぎて入学率が落ちたため、大学の予算は大きな影響を受けた。またベトナム戦争の終結とともに学生側のムードも変化した。就職戦線の厳しさに直面した学生たちは法律、ビジネス、工学などの実務的で高収入が得られる仕事に関心を向けたため、ラテンアメリカ研究の中心である人文科学や社会科学の分野に入ってくる学生の数は減少した。ラテンアメリカにおける革命の拡散の脅威は1960年代と1970年代のほとんどを通じて現実のものとならなかった。一方ミサイル危機を終結させたケネディ=フルシチョフ協定は緊張緩和をもたらすとともに西半球における核による対決の危機を事実上とりのぞいた。ニクソン大統領によって「進歩のための同盟」は終止符が打たれ米国の対ラテンアメリカ援助資金が大幅に減少したため、大学がラテンアメリカと取り交わしていた技術契約は影響を受けた。キッシンジャー国務長官の下で米国の関心はアジア(ベトナム戦争、米中関係の回復、日本経済の挑戦)、ヨーロッパ(ソ連との緊張緩和、チェコスロバキア危機、西ヨ

ヨーロッパ経済の挑戦), およびアフリカと中東(OPECと石油ボイコット, 南ア連邦とローデシア問題, イスラエル・エジプト和平, アンゴラとエチオピアおよびイランにおける紛争)に向けられた。財政的損失に苦しむフォード財団が国際研究への資金援助を削減したが, ラテンアメリカはこの影響を最も大きく受けた地域であった。一方国家防衛教育法(NDEA)による資金が凍結されたためインフレにより資金は実質半減した。1970年代末にアジアは国際研究のための連邦政府資金の約40%を受けていたが, ラテンアメリカはわずか10%しか受けていなかったのである。

ヨーロッパにおいてもラテンアメリカ研究への関心は低下していた。イギリス政府は大学のラテンアメリカ研究センターに対する財政援助を打ち切ったし, 西ドイツの外務省はラテンアメリカへの関心を弱めた。チリとベネズエラでキリスト教民主党が政権を失った結果, イタリアと西ドイツではこの分野への関心が低下した。スウェーデンでは与党の交代によってラテンアメリカへの援助が削減された。

しかしラテンアメリカでは1970年代後半に米国やヨーロッパとは対照的な傾向がみられ, 域内におけるラテンアメリカ研究プログラムを組織し強化するためにいくつかの財政的措置がとられた。1977年にラテンアメリカ大学連合とユネスコが大学内にラテンアメリカ研究センターを設置することを要請した。米州機構でも同様の決議がなされた。ヒューストンで開かれた米国ラテンアメリカ学会(LASA)の全国大会では米州機構の援助によりラテンアメリカ研究センターないしプログラムの設置に関する討論会が設けられた。1978年11月にいくつかの大学の代表がメキシコ市にあるメキシコ国立自治大学のラテンアメリカ研究センターに集まり, 実行計画を作成した。第2回会合は1980年6月にカラカス市にあるシモン・ボリバル大学のラテンアメリカ高等研究所で開催された。第3回会合は1981年末頃にブラジリアで開かれる予定である。第3表にみるようにラテンアメリカにおけるラテンアメリカ研究プログラムのほとんどは1970年代後半に設置されている。

1980年代はいくつかの理由から米国におけるラテンアメリカ研究に新たな関心が集まる期間となろう。その理由として次のようなものをあげることができる。(a)1979年に外国語と外国研究に関する大統領委員会報告および一連の

追跡調査と活動報告が出されたこと、(b)中米およびカリブ海地域で不穏な状況が活発化しており米国の生命線であるこの地域において革命の脅威が再び発生していること、(c)キューバが行っている海外、特にアフリカとラテンアメリカに対する干渉、(d)メキシコ、キューバ、ハイチから大量に移民が流入したために発生している諸問題、(e)米国にとってメキシコ、ベネズエラ、エクアドルのようなラテンアメリカのエネルギー供給国の重要性が増していること。

以上述べてきたことから明らかなように、世界でラテンアメリカ研究プログラムが設置され且つ発展するにあたって、文化的要因は最も重要な要素ではなかったのである。もし文化的要因が重要な要素であったなら、米国や西ドイツあるいはイギリスではなくむしろポルトガルやスペインそしてラテンアメリカで最もすぐれたラテンアメリカ研究プログラムが生まれたであろう。つまり経済および政治的要因がラテンアメリカ研究の発展では重要な役割を果たしてきたのであった。ヨーロッパにおける最初のラテンアメリカ研究プログラムは投資と貿易と移民問題に関するものであった。米国の創設期のプログラムは移民・言語および貿易問題に対処するためにメキシコ国境沿いの諸州で設置された。そして米国におけるラテンアメリカ研究ブームは米国の対ラテンアメリカ投資と貿易が増加したことで米国の国家安全保障と覇権が脅やかされているとする現実的ないしは想像上の脅威の結果起ったものであった。ソ連では、キューバがラテンアメリカにおける社会主義存立の可能性を示したソ連の対ラテンアメリカ貿易が増大してはじめて発展した。スウェーデンと日本はラテンアメリカと文化的類似性を持っていないが、優れたラテンアメリカ研究のプログラムを持っている。それらのプログラムもまた貿易と投資への関心から生まれたものであった。ポルトガルにおけるラテンアメリカ研究の低水準に比較してかなり発達しているスペインの場合、スペインに対してとられた世界的なボイコットを打ち破るためにフランコが1950年代にとった戦術によるものであった。最後にラテンアメリカの大学におけるラテンアメリカ研究プログラムの発展はこの地域内の貿易がかなり発展する1970年代後半になるまでみられなかった。そしてラテンアメリカ研究プログラムが設けられたのは、メキシコやベネズエラのようにこの地域内で指導的な政治的役割を果たそうとする最も発展した国々であった。

II. 主要なラテンアメリカ研究プログラム

表1は米国の大学における主要なラテンアメリカ研究プログラムを比較したものである。これらのプログラムはすべて教育と研究を結びつけたもので、優れた図書館と研究資料を持ち、出版活動ならびに学外活動を行っている。表が示すように、教員数、関係学部、コース、蔵書数によってランク付けられた最も大きなプログラムはテキサス大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLAと略す)、ピッツバーグ大学、ウイスコンシン大学、ニューメキシコ大学およびイエール大学である。

米国におけるラテンアメリカ研究の教育プログラムの構成には、次のような4つの基本的なアプローチがある。(1)ラテンアメリカ研究に対して地域研究の学位(学士号、修士号、博士号)を与える方法で、このタイプはテキサス大学、フロリダ大学、UCLA、ニューメキシコ大学など最も歴史の古いプログラムで採用されている。地域研究の学位には専攻学問分野が含まれているが、この学位をとっても職を得るのが困難であるためこのタイプのプログラムは減少傾向にある。(2)専門職志向の学部ないしは特定のテーマに志向した学位と結びついた地域研究の学位を与える方法で、例えば教育・ビジネス・公衆衛生・人口・都市問題をラテンアメリカと関連して学ぶやり方である。このタイプは最近始まったものでUCLA、ニューメキシコ大学、スタンフォード大学、テューレン大学、ピッツバーグ大学が採用しており、さらに増加する傾向がみられる。(3)各専攻学問分野の学位をとりながらラテンアメリカ研究に対する特別の証書を与える方法で、ピッツバーグ大学とフロリダ大学で採用されており、卒業生の就職状況は良好である。(4)各専攻学問分野の中でラテンアメリカ地域を副専攻する方法で、イエール大学、コーネル大学、イリノイ大学で採用されている。

出版活動に関しては、表1にある大学はすべて大学出版部を持ち、ラテンアメリカ研究シリーズを出版しているか出していなくても少なくとも関心を持っている。その中でも出版活動が最も活発なのはテキサス大学、UCLA、ピッツバーグ大学、フロリダ大学、スタンフォード大学、ニューメキシコ大学である。これらの大学の出版活動の中には復刻版シリーズや研究書もしくは報告書のい

ずれかまたはすべてを出しているものもある。ラテンアメリカ研究の分野で最もすぐれた学術雑誌のいくつかは意外にもこれらの大学で出版されているのではない。*Latin American Research Review* は現在ノース・カロライナ大学で出版されているが、1982年半ばにはニューメキシコ大学へ移ることになっている。*Hispanic American Historical Review* はデューク大学で出版されているが、1981年にニューメキシコ大学へ移る予定である。*Journal of Interamerican Studies and World Affairs* はマイアミ大学から、*Inter-American Economic Studies* はワシントン、D.C.で出版されている。米国で最高水準のラテンアメリカ研究プログラムが出版しているいくつかの学術雑誌と年鑑には次のものがある。ピッツバーグ大学から *Cuban Studies*, *Revista Iberoamericana* と *Latin American Indian Literatures* が出されている。UCLA からは *Journal of Latin American Lore* と *Statistical Abstract of Latin America* が、またカンザス大学からは *Latin American Theater Review* が出されている。これらのプログラムのいくつかからは会報も出されている。

表1が示しているように米国のラテンアメリカ研究プログラムの大部分は4つの異なる資金源を持つことによってより安定した財源と独立性を保っている。フロリダ大学、イリノイ大学、ニューメキシコ大学、ピッツバーグ大学、テキサス大学、テューレーン大学、UCLA、ウイスコンシン大学およびイエール大学の9つの大学におかれたラテンアメリカ研究プログラムは連邦政府の資金を大学院および学部レベルの地域研究センターの財源にあてている。これら9大学のうちテューレーン大学とイエール大学は私立大学であるため州政府の資金は実質上入っていない。フロリダ大学、ピッツバーグ大学、スタンフォード大学、テキサス大学、テューレーン大学、UCLA およびイエール大学の7つのラテンアメリカ研究プログラムは最近アンドリュース・W.メロン財団から多額の資金を受けた。ティンカー財団もまたニューメキシコ大学、ピッツバーグ大学、スタンフォード大学、テキサス大学、UCLA およびウイスコンシン大学に対して教授職ポスト、研究インターン、夏期調査研究費などの財源を援助してきている。

米国には学際的性格の全国的な専門研究者学会である米国ラテンアメリカ学会(LASA)が1965年に設立され、現在では2,000名を越える会員をもってい

る。同学会は *Latin American Research Review* と年4回の会報を出し、1年半ごとに全国大会を開催している。この他、地域別のラテンアメリカ研究学会が10あり、東北部、南西部のような米国のさまざまな地域に居住する研究者がそれらの地区別学会に所属している。最後に、アメリカ歴史学会のようないくつかの専門の学問分野の学会の中にもラテンアメリカやカリブ海地域部会が設けられている。

表2はヨーロッパにおける主要なラテンアメリカ研究プログラムを比較したものである。これらの半分は米国におけるような教育と研究を並行させた大学でのプログラムではなく、主として研究に従事する公的あるいは私的な研究所(アムステルダム、ハンブルグ、モスクワ)が、図書館(ベルリン)、あるいは貿易・文化交流・情報提供を促進するための機関(マドリードのイベロアメリカ協力研究所とローマのイタリア・イベロアメリカ研究所)である。

表2にあげた大学のプログラムはストックホルムを除いてみなラテンアメリカ研究(イギリスのすべての大学とロストック)が地域研究に結びついた専門学部の学位(ベルリンとパリ)を出している。すべてのプログラムが実際に博士号を出すほか2のプログラムではさらに第2の博士号を出しているが、最も一般的な学位は修士号であり、2つのプログラムだけが学士号を出している。モスクワのラテンアメリカ研究所は大学のプログラムではないが、博士過程を設けておりまた既に博士号を持つものに対しては「科学労働者」という最高の学位を出している。意外なことだが最も優れた図書館は大学にあるのではない。最も優れた図書館の一つはベルリンにあるイベロアメリカ研究所(蔵書数47万5000冊)で、もう一つはマドリードにあるイベロアメリカ協力研究所(蔵書数45万冊)である。前者は蔵書内容が片寄っておらずバランスがとれているが後者は人文系に片寄っている。

ヨーロッパのラテンアメリカ研究プログラムのいくつかはラテンアメリカに関する本を出版しており、オックスフォード大学、ロンドン大学、ケンブリッジ大学の出版部、ベルリン図書館の単行本シリーズ(ドイツ語・スペイン語・英語)とモスクワの研究所(基本的にロシア語)、またグラスゴー、ハンブルグ、ストックホルムでは研究書シリーズが出版されている。掲載する論文のほとんどが歴史研究である *Journal of Latin American Studies* はイギリスのラテンア

リカ研究センターが共同出版事業としてケンブリッジ大学から発行している学術雑誌である。マドリードの研究所は人文系雑誌である *Cuadernos Hispanoamericanos* を発行、パリ大学は学際的な雑誌である *Cahiers de Amériques Latines* (フランス語) を発行、またモスクワの研究所は総合雑誌 *América Latina* (ロシア語とスペイン語) を発行している。西ドイツではケルンにある研究センターが歴史論文を掲載する *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas* という年報を出している。一方アムステルダムにあるセンターは3年に1度ヨーロッパのラテンアメリカ研究者名簿である *Latinoamericanistas en Europa: Registro Bio-Bibliográfico* を編集発行している。

表2が示しているように、イギリス、西ドイツ、スウェーデン、フランスにある研究センターは複数の財源を持つが大学の予算で運営されているが、マドリード、モスクワおよびローマにある研究センターは中央政府の財源で運営されている。

ヨーロッパのラテンアメリカ研究者の集りの中で最も古くまた最も多くの国々の研究者が参加している学会はロンドンに本部を置くヨーロッパ・ラテンアメリカ社会科学研究審議会(CEISAL)である。この他に、歴史学者の集りであるヨーロッパ・ラテンアメリカ歴史学研究者学会(AHILA)がある。最後に西ドイツ(ADLAF)、スカンジナビア(NOSALF)、フランス(AFSSAL)、およびイギリス(イギリス・ラテンアメリカ研究学会)には全国的規模のラテンアメリカ研究者の学会がある。

表3はラテンアメリカ諸国に設置されたラテンアメリカ研究センターについての数少ないデータである。これらのセンターの3分の2は1970年代後半に設立されており、残りの3分の1のほとんどは1960年代半ばに設立された。これらのセンターは大学内に設置されており、すべて教育か研究またはその両方に従事している。キューバにある2つのプログラムは文化省が運営するもので、1つは広報活動を担当しもう1つは研究に従事している。ベネズエラにはロムロ・ガリエゴス・センターがあり、大学に所属せず研究にのみ従事している。

最も有力なプログラムの中4つはベルグラノ、ブラジリア、サンチアゴおよびトリニダードに置かれており、ラテンアメリカに重点を置いた国際研究の分野で学士号と修士号の両方かいずれか一方の学位を出している。研究センタ

ーの中ではメキシコとカラカスのわずか2つのセンターだけがラテンアメリカ研究の学位を出している。メキシコ国立自治大学は3つの関連学部で学士号、修士号、博士号を出しており、カラカスのシモン・ボリバル大学ではラテンアメリカ研究の修士号を出している。

これらの研究センターが出している出版物の量は米国やヨーロッパと比較してはるかに少なく、またその出版のほとんどが最近はじまったばかりである。ハバナ、サンチアゴ、メキシコ、カラカスでは研究書が出版されている。これらのセンターから出されている学術雑誌はわずか2～3種で、掲載論文のほとんどが文学関係である *Casa de las Américas* (ハバナ)、国際問題を中心とする *Estudios Internacionales* (サンチアゴ)、文学および政治の *Actualidades* (カラカスのロムロ・ガリェゴス研究所) と学際的雑誌 *Mundo Nuevo* (カラカスのシモン・ボリバル大学) がある。

3つのセンターを除くとすべてのセンターは大学の予算で運営されているが、その中2つのセンターは大学の予算の他に中央政府または民間財団の資金を受けている。民間のセンターであるキトーのセンターを除けば、中央政府が一般的には唯一の大学の財源であるから、現実にはこれらすべてのセンターはほとんど政府の資金に依存していると言える。これは、政府によって直接資金を与えられているキューバのセンターやベネズエラのロムロ・ガリェゴス・センターの場合も同様である。

ラテンアメリカにはラテンアメリカ研究者の国際的な学会もまた国別の学会もまだ存在していない。ラテンアメリカ・カリブ海域学会の会則がカラカスで1980年6月に検討されたが、その承認はブラジルで開かれる次の会合まで延期された。

Ⅲ. ラテンアメリカ研究が直面する諸問題

1) 資金と運営に関する問題

2～3の例外を除くと米国のラテンアメリカ研究プログラムは複数の学外資金を受けており大学自体も相当に関与しているので、財源的には安定しているだけでなく政府からも独立している。しかし連邦政府資金が将来削減されたり

打ち切られたりすると、これらのプログラムのいくつかは相当の打撃をうけることになる。従って、レーガン政権の国際研究教育に対する政策が将来重要な影響を与えることになろう。運営面についてみると、テキサス大学とフロリダ大学のようなわずか2～3のプログラムだけが教員を直接採用しているにすぎない。他のプログラムでは教員はすべて他の学部や学科に所属しながら参加しているため、プログラム自体に教員を採用し昇格させる直接的な権限が欠けている。

ヨーロッパにおけるラテンアメリカ研究の資金は全般的にみると米国のプログラムの資金よりはるかに少ない。最も資金の豊かな大学のプログラムは西ドイツとイギリスのものである。しかしイギリスのラテンアメリカ研究センターは政府による財政援助が打ち切られたために大きな打撃を受けている。モスクワのラテンアメリカ研究所に対してソ連政府が与えている資金は安定しているようである。一方マドリードの研究所に対してスペイン政府が与えている資金はソ連の場合とは反対に不安定で、同研究所は予算の縮小に苦しんでいる。より多角的な財源を持つプログラムの方が政府から独立しているのに対して、中央政府の資金に完全に依存しているプログラム(モスクワとマドリードの場合)は政府の強い影響下にある。研究と振興活動に従事するプログラムは専従職員を持っているのに対して、大学に置かれたプログラムは米国の場合と同様に雇用と昇格の問題をかかえている。

ラテンアメリカにおけるプログラムは、メキシコとベネズエラを例外としていずれも資金が乏しく、中央政府の資金に高度に依存している。これらのプログラムの多くはより広い国際プログラムの1部を成しているにすぎないため専従職員を雇用する資金はほとんどないか全く持っていない。

2) 専攻学問分野と地域研究の対立

各専攻学問分野の研究者は理論、方法論および数量化に強いが特定の地域への応用ということになるとその地域の言語と文化の知識が十分でないために弱いと、一般的に考えられている。一方、地域研究者はその地域に関しては必要な基礎知識を持っているが理論的把握が弱くまた個別の国に焦点をあわせる傾向がこれまで強かった。しかし1970年代においては米国とヨーロッパの地域研究者の間で理論と方法論と数量化および分析等を駆使する傾向が著しくなっ

た。これは伝統的な地域研究の学位がラテンアメリカへ知識を応用することのできる専攻学問分野と地域研究の両方の訓練に重点をおく方向へと移行していることと関係がある。

3) 単一専攻分野と複数専攻分野アプローチおよび学際的アプローチ

大学の機構上、またラテンアメリカ研究プログラムが各専攻学問分野の教員に依存していることから、単一専攻分野のコースとセミナーがカリキュラムでは優勢である。これまでに統合しようとする試みがしばしば行われ複数専攻分野の教員陣が設けられたが、真の学際的なものにはなりえなかった。ラテンアメリカに関する学際的研究と、失業・人口・エネルギー・移民・不平等などこの地域の主要な問題を総合的に分析することのできるような方法論を見出す必要がある。

4) 人文科学と社会科学の均衡の問題

過去 20 年間米国のラテンアメリカ研究プログラムはヨーロッパやラテンアメリカのプログラムより分野間の均衡をうまくとってきた。事実米国における学生の入学傾向は言語・文学・歴史のような人文科学系よりも経済学と社会学を除く社会科学系の分野とビジネス・教育・法律・公衆衛生などの専門職につながる分野に多い。しかし 1980 年には表 1 にあげた 12 のプログラムの中 4 つのプログラムのみが社会科学系の所長を擁しており残り 8 つのプログラムはいずれも歴史・図書館学・言語学の専門家によって運営されていることは興味深い。

1976 年においてヨーロッパのラテンアメリカ研究者の 70% は人文科学系であった(歴史 30%, 人類学と地理学 27%, 文学・言語学 13%)。いくつかの国では人文科学系が 70% 以上を占めており、スペインの場合ラテンアメリカ研究者の 93% は人文科学系であった。ラテンアメリカ側の統計はないが、表 3 が示すように最も代表的な分野は国際関係学と文学である。ラテンアメリカの大学の研究者のほとんどは人文科学系であり(文学, 法律, 歴史), 経済学者や社会学者は国際機関や米州組織の機関に集中している。

5) 概論的講座と専門講座の問題

ラテンアメリカ関係コースがさまざまな専門分野の学生を魅きつけているという理由からも、コースの内容は専門的で分析的且つ比較研究的なものよりも

入門的で叙述的概説的な傾向が固定化している。この数年間にいくつかの改善がみられはしたが、政策志向的コースはほとんどない。米国では歴史は一般的に特定の時代か国に集中しており、外交・人口・技術史などのようなテーマ別ものは少ない。ヨーロッパの状況は米国の場合よりましである。経済関係では総合開発問題に焦点をあてた概説コースが多く、雇用・分配・国際金融・貿易などのような個別のテーマにしぼったコースは少ない。米国とヨーロッパで設置されている語学コースのほとんどはスペイン語を第一としポルトガル語を第2語学としており、原住民の言語のコースはあっても極めて少ない。これらの大学のプログラムではまた文学と語学トレーニングの間に対立が存在している。なぜなら教員は印刷された業績を重視する評価ゆえに語学コースを犠牲にしても文学に重きをおいているからである。

6) 研究上の問題

資金上の制約と専門分化のため、グループ研究よりは個別研究が、比較研究よりも単一国研究が、重要で複雑な長期にわたる現象よりは比較的重要でなく短期的問題に焦点をあてた研究がこれまではやってきた。米国のラテンアメリカ研究プログラムでは、フランス、西ドイツ、ソ連のプログラムのようなグループ研究に対する資金援助が欠けている。その結果、個々の研究者は自分の研究資金を集めねばならず、先に指摘したような問題を発生させてきたのである。ラテンアメリカの大学のプログラムでは研究資金は一般的には全くないかほとんどないに等しい。この例外はメキシコとカラカスのプログラムである。

7) 図書館の充実とインフレーション

図書の価格の値上りはヨーロッパよりも米国の方がはるかに低い、それでもインフレーションは図書予算を削減しており多くのプログラムでは図書の購買力が低下している。米国では、1国あるいは1地域に専門化することによって重複をさける協力体制と図書館業務のコンピューター化によって図書資料を相互に活用しようとする傾向がみられる。この傾向はヨーロッパではイギリスでいく分か協力体制があるものの一般的には存在していないし、図書館を充実させるための資金がないラテンアメリカでは協力体制はヨーロッパ以下である。

* 米国ピッツバーグ大学ラテンアメリカ研究センター所長、前米国ラテンアメリカ学会会長

表1 米国の大学におけるラテンアメリカ研究プログラム—1970年代末—

大 学 名	設 立 年	関係 教員 数	関連 学部 数	語学および 地域研究コ ースの数	蔵 書 数	授与する学 位	財 源
Cornell	1961	32	11	n. a.	200,000	Graduate minor	U P
Florida	1930	80	21	185	160,000	MA, UG+ G Cert.	UCSP
Illinois	1965	42	13	63	200,000	UG+G Concent.	UCSP
Kansas	n. a.	34	11	80	100,000	BA, MA	U S
New Mexico	1939	64	13	160	154,000	BA, MA + Bus. deg.	UCSP
Pittsburgh	1964	80	16	235	145,000	UG+G Certif.	UCSP
Stanford	1960s	50	11	100	n. a.	BA, AM+ other jointly	U P
Texas	1915, 1942	185	16	105	353,000	BA, MA, PhD	UCSP
Tulane	1924, 1940s	35	13	107	105,000	BA, MA + others jointly	UC
UCLA	1947	113	22	247	130,000	BA, MA + others jointly	UCSP
Wisconsin	1930	67	13	103	350,000	BA, MA + minor in PhD	UCSP
Yale	1960s	42	16	117	220,000	Grad. Concent.	UC P

[出所] U. S. Department of Education, International Studies Branch, 1977. の出版物および各プログラムが発行しているパンフレットによる。

U=University P=Private C=Federal Government S=State Government
 BA=Bachelor MA=Master PhD=Doctorate UG=Undergraduate
 G=Graduate

表2 ヨーロッパにおけるラテンアメリカ研究プログラム—1970年代末—

プログラム名	設立年	関係教 職員数	分 野	プログラムの 内容	蔵書数	授与する 学位	財 源
Amsterdam	1964	8	ESD	研究	16,500	なし	C
Berlin Library	1930	12	Gen	図書館	475,000	なし	CSP
U. Berlin	1970	26	7	教育と研究	n. a.	M, D, D ²	U
U. Glasgow	1967	14	LS	教育と研究	5,000	B, M, D	U
Hamburg	1962	8	ESD	研究	9,300	なし	CSP
U. London	1965	41	LS	教育と研究	51,000	M	U
Madrid	1946	60	Gen	広報	450,000	なし	C
Moscow	1961	125	4	研究	50,000	D, D ²	C
U. Oxford	1964	25	LS	教育と研究	82,000	M, D	U P
U. Paris	1954	45	7	教育と研究	47,000	B, M, D	UC
Rome	1966	76	Gen	広報	45,000	なし	C
U. Rostock	1964	15	LS	教育と研究	30,400	M, D	U
U. Stockholm	1951	6	4	研究	27,400	なし	U

[出所] Carmelo Mesa-Lago, *Latin American Studies in Europe*, University of Pittsburgh Latin American Monograph and Document Series, No. 1, 1979.

ESD=Economic+Social Development Gen=General LS=Latin American Studies

B=Bachelor M=Master D=Doctorate D²=Second Doctorate

U=University P=Private C=Central Government S=State/City Government

表3 ラテンアメリカにおけるラテンアメリカ

国 名	所 属 機 関	プ ロ グ ラ ム 名
Argentina	Universidad de Belgrano	Instituto de Estudios Internacionales
Brazil	Universidade de Brasilia	Depto de Ciencias Sociais e Estudos Internacionais
Colombia	Universidad de los Andes	Instituto de Relaciones Internacionales
Colombia	Universidad EAFIT	Centro de Estudios Latinoamericanos
Cuba	Ministerio de Cultura	Casa de las Américas
Cuba	Ministerio de Cultura	Centro de Estudios de América
Chile	Universidad de Chile	Instituto de Estudios Internacionales
Ecuador	Pontificia Universidad Católica	Centro de Estudios Latinoamericanos
Mexico	Universidad Nacional Autónoma de México	Centro de Estudios Latinoamericanos
Trinidad-Tobago	University of West Indies	Institute of International Relations
Venezuela	Universidad Simón Bolívar	Instituto de Altos Estudios de América Latina
Venezuela	Centro de Estudios Latinoamericanos	"Rómulo Gallegos"

〔出所〕 The Organization of American States, Department of Cultural Affairs(Washin-

* 計画中

(国際)研究プログラム—1970年代末—

所 在 地	設 立 年	関係教 職員数	分 野	プログラムの 内容	授与す る学位	財 源
Buenos Aires	1976	15	国際関係	教育	M	U
Brasilia	1976	18	国際関係	教育	B, M	U
Bogotá	1979	n. a.	ラテンア メリカ	教育と研究	n. a.	U
Medellín	1980	1	ラテンア メリカ		なし	U
Habana	1960		ラテンア メリカ・文学	広報	なし	C
Habana	1978		北米・ラ テンアメリカ	研究	なし	C
Santiago	1965		国際関係	教育	M	U
Quito	1970年代末					
Ciudad México	1966	40	ラテンア メリカ	教育と研究	B, M, D	U
Trinidad	1966	7	国際関係	教育と研究	B, M	UC
Caracas	1976	10	ラテンア メリカ	研究	M*	U P
Caracas	1974	25	ラテンア メリカ文学と 社会科学	研究	なし	C

gton, D. C., 1979)が集収した資料による。

文 献

- Cole Blasier, "The Soviet Latin Americanists," *Latin American Research Review*, 16: 1 (1981).
- Renate Ferno & Wolfgang Grenz, eds., *Handbuch der deutschen Lateinamerika Forschung* (Hamburg: Institut für Iberoamerika-Kunde, 1980).
- GRAL-CIELA, *Repertoire des recherches latinoamericanistes en France*, no. 1 (Toulouse: Université de Toulouse-Le Mirail, 1979).
- Michael Grow, *Scholars' Guide to Washington, D. C. for Latin American and Caribbean Studies* (Washington, D. C., Smithsonian Institution Press, 1979).
- Iris M. Laredo, "Análisis y evaluación de los programas de estudios latinoamericanos," Proyecto preparado para el Depto. de Asuntos Culturales de la OEA, Washington, D. C., 1978(mimeo).
- Latin American Studies in Europe: Final Report and Working Papers of the Twenty-Third Seminar on the Acquisition of Latin American Library Materials* (Austin: SALALM Secretariat, 1979).
- Carmelo Mesa-Lago, *Latin American Studies in Europe* (Pittsburgh: Latin American Monograph and Document Series, no. 1, 1979).
- _____, *Latin American Studies in the 1980s: Establishing LASA Priorities and Policies* (Consortium of Latin American Studies Programs, no. 11, 1980).
- Magnus Mörner y Riccardo Campa, *Investigación en ciencias sociales e históricas sobre América Latina: Enfoque preliminar para una guía* (Roma: CEISAL, 1975).
- New Directions in Language and Area Studies: Priorities for the 1980s* (Consortium of Latin American Studies Programs, no. 9, 1979).
- Francisco Orrego Vicuña et al., *Los estudios internacionales en América Latina: Realizaciones y desafíos* (Santiago: Editorial Universitaria, 1980).
- Adriaan van Oss, ed., *Latinoamericanistas en Europa: Registro bio-bibliográfico de 1976* (Amsterdam: Centro de Estudios y Documentación Latinoamericanos, 1976).
- Rubén M. Perina, "Estudios latinoamericanos y el estudio de las relaciones internacionales de América Latina," Depto. de Asuntos Culturales de la OEA, Washington, D. C., 1980(mimeo).
- Carlos M. Rama, "Visión crítica del estado actual del latinoamericanismo europeo," *Anuario Estudios Latinoamericanos*, 10(1977).
- Strength Through Wisdom: A Critique of U. S. Capability* (A Report to the President from the President's Commission on Foreign Language and International Studies) (Washington, D. C., 1979).